

薦神社と傀儡師

田 畑 博 子

1、はじめに

宇佐神宮は、全国に4万社あまりある八幡社の総本宮である。宇佐神宮については神仏習合が早くに行われたということで、中野幡能、飯沼賢司をはじめ多くの研究者の論考がある。それらは主に歴史資料からの論考で、中野氏の『八幡信仰史の研究』及び中野編『宇佐神宮史』全16巻、さらに飯沼氏の『八幡神とはなにか』などの論考が緻密に行われている。しかし中野氏が『八幡信仰事典』で「八幡神の性格あるいはその成立過程も不明な点が多いとされるが、八幡神および当宮の成立は大和朝廷の九州（隼人）制圧と深く関係していたことは確かであろうといわれる。」と指摘しているように成立に関しては不明な点が多い。この成立段階の宇佐神宮にまつわる周辺事項を探ってみたい。

大分県中津市伊藤田で行われている「傀儡相撲舞」は、1983年に種別「1 民俗芸能 2 渡来芸・舞台芸」、名称「古要神社の傀儡子の舞と相撲」で国重要民俗文化財に指定されている。指定された際の文化庁の解説には次のように記載されている。

三人遣いの人形芝居として知られる人形浄瑠璃文楽を頂点とする日本の人形戯の伝統は、全国各地にその発展過程を暗示させる諸形態の人形戯を残存させてきているが、これらの中でも奈良・平安時代から活躍をはじめている傀儡子は、日本の人形戯の源流として注目されている。この源流をうかがわせる傀儡子系の人形戯が、いまでも大分県の古要神社と福岡県の八幡古表神社に伝承されており、日本の芸能史の上で極めて貴重な存在となっているので、これを重要無形民俗文化財に指定し、その保存をはかる。

古く宇佐八幡宮の放生会が和間の浜の浮殿で執行されていた時、宇佐八幡宮の末社である古表、古要の両社からそれぞれ傀儡子を船に乗せ、海上から浮殿に向かって傀儡子の舞を奉納したといわれている。応永二十七（一四二〇）年、元和（一六一七）年に放生会が復活されているが、その後は打ち切りとなり、現在は古要神社の単独の行事として伝承されてきている。開催は旧暦閏年の新暦十月十二日の夜であり、海に出る放生会の御神幸は行われていない。古要神社の傀儡子の舞と相撲は、本殿と拝殿の間にある申殿【もうしでん】で行われる。

福岡県の八幡古表神社のものと同じく傀儡人形は、神像型人形と相撲型人形に分けられ、前者は古要舞あるいは細男舞、神舞などと呼ばれる舞を演じ、後者は古要相撲とか神相撲と呼ばれる演技を見せる。

神像型人形は男神と女神に分かれるが、いずれも一木造りで、胴体の下部が細くなり、遣い手はその部分を握って人形を遣う。両手は肩先に釘で取りつけられ、その両手に紐をつけて引っ張るこ

とによって両手を上下に動かすことができるようになってきている。これに神衣と呼ばれる人形衣裳をつけて舞わすのである。(以下略)【文化庁・国指定文化財等データベース】

ここで指摘されているように、この「傀儡相撲舞」は、宇佐神宮放生会の奉納のために舞われた神事である。現在この「傀儡相撲舞」の神事は、中津市伊藤田古要神社では三年に一度、福岡県築上郡吉富町古表神社では四年に一度、それぞれ行われている【注1】。「傀儡相撲舞」に関しての研究者の多くはこの「傀儡相撲舞」が「渡来芸」といわれる所以や、来歴、伝播、伝承について詳細に検証しているが、その演者の所属については論評していない。この地域一带を見ると中津市伊藤田に隣接する北原きたばるには、1957年3月に大分県の無形民俗文化財に指定された「北原人形芝居」がある。この北原地域が薦神社の祭祀を祀る氏人であること、隣接する北原と伊藤田が共通の人形遣いの地域であることを背景に、伊藤田の人形遣いが薦神社に属するものではないかと考えた。

2、宇佐神宮放生会

720(養老4)年に大隈と日向の隼人が反乱を起こしたが、その時、朝廷の祈願により八幡神が託宣を下し、隼人を平定した。その帰還時に多くの隼人の首を持ち帰り、宇佐神宮に祀った。しかし人々は怨霊を恐れ、霊を祀り平安を祈った。それは疫病や凶作などが続いたため隼人の霊の祟りだという噂が流布したからである。その供養として行なわれたのが蜷貝を海に放つという放生会である。放生会では、古表神社と古要神社が傀儡子舞を奉納し、福岡県田川郡からは香春岳の銅で作った鏡が奉納されていた【注2】。

宇佐市和間浜村浮殿において宇佐神宮の放生会が行われるが、時代によって変遷があった。『宇佐宮齋会式』、「八幡宇佐宮放生会記(『北文書』)」によると8月1日に「浜本立」があり、その日から毎夜宇佐宮では「細男舞」を舞った【宇佐市史・下1979 57頁】。この朔日に古表神社、古要神社から傀儡子を和間海上に送ることが重要な任務であった。古表神社については『豊前志』では、

聖武天皇天平十六年甲申、宇佐八幡宮、依御託宣、始被行放生会、昔、大隅薩摩隼人降伏之時、奏伎楽於戰場、今又、表古彫木像、云々、自廣津洲崎、八月十三日、神輿及傀儡子、奉乗船、到和間海上、奏細男伎楽悉表古之形体也【豊前志1931 168頁】

とある。また古要神社については『下毛郡誌』に、

往昔、宇佐宮の放生会には當宮の御輿を奉じ、和田の浜より船に乗せ奉りて、宇佐郡和間浜の浮殿に行幸ありき、例祭は毎年陰曆八月十一日十二日に行はる【下毛郡誌1927 321頁】

とある。このようにこの二つの神社は宇佐神宮の放生会で、それぞれが一艘の船に乗って浮殿の南脇から漕ぎ出し神祭りをし、傀儡子が海上にて浮殿御前舞を行った。それについては、次のように記されている。

傀儡子の船二艘、一艘は上毛郡小今井の役、一艘は下毛郡今津の役也之に应じて浮殿の御前に漕

ぎ参りて舞樂を奏する也【無形民俗資料くぐつの舞及び相撲1955 2頁】。

この後、蛭を放し、導師が表白をし供養を遂げるが、その際の放生陀羅尼は陰陽師が唱えることになっていた。そして頓宮に還御するが、この間楽入乱声を吹いている。

その後朝政の衰退により石清水八幡に行事の一部を遷し、鎌倉時代1306（徳治2）年から室町時代の1420（応永27）年まで中止されている。その後再開されるが、黒田孝高が藩主になると、再び断絶させられた。これは1587（天正15）年に薦神社の宮司であった池永重則が黒田に叛旗したためであった。

曳汐康浩氏によると、その後豊前の国主細川忠興によって1617（元和3）年に宇佐神宮の再興と神事の復興がはかられたが、その後廃れたという【曳汐2002 408頁】【注3】。しかし再び1902（明治35）年に再興され、古表神社は古例に従って宇佐郡和間村浮殿に神幸を続けたが、第二次世界大戦により中断し、1973（昭和48）年再神幸を始めた。『宇佐市史・下』には、その間、古要神社は享保年間以降神幸できずにいたが、二百数十年ぶりに1977（昭和52）年に再興されたことが記されている【宇佐市史・下1979 48～49頁】。

その後はこの祭礼があまりに盛大なため、担い手の確保ができず、宇佐神宮と和間神社の間を三日間かけて往復する放生会が行なわれている【注4】。船を出して傀儡舞が行なわれることもなく、2015年に調査に行った際、人形は当然のことながら船だけでも出すことはなかった。地元の方々に理由を聞くと、潮が合わないとのことであった。また何よりも漁業の衰退と、船の減少により、船団を組んで大掛かりにするのが難しくなり、2001年には福岡県豊前市宇島の船を借りて行なったとのことである。そして漁師が中心となって保存会が作られたが、伝承は困難を極めている。かつてここで行われていた傀儡舞は放生会を離れ、中津市伊藤田で舞だけ舞われるという形になって宇佐神宮との関係は薄れている。

3、薦神社

薦神社、別名大貞八幡宮がある大貞は、今でもこの地域の中心となっており、そこにある薦神社は生活の中での信仰が根付いている【注5】。薦神社は宇佐神宮の元宮とされ、造営は承和年中（834～48）と伝えられている。八幡の由緒を記した『八幡宇佐宮御託宣集』によれば薦神社は古くから八幡神と深いかわりがあった【注6】。

本宮の六年に一度の御行幸会の時、薦神社の旧御験をば、御炊殿に安^みゑ奉る。御炊殿の旧御験をば、本宮の旧御輿に乗せ奉り、当社の神殿に渡し奉る【重松1986 120頁】。

と『八幡宇佐宮御託宣集』にあるように、宇佐神宮の二大祭の一つ、行幸会の中心は薦神社の薦枕である。

720（養老4）年、反乱を起こした日向・大隈の隼人に対し、中央政府の征討軍は八幡神を奉じて鎮圧に向かう。この時、神輿には三角池に自生する真薦で造った枕型の御験（神を表すもの）が乗せられていた。この後も薦枕は八幡神の御験として永く用いられた。薦枕は6年毎に新しく造られ、八幡神とかかわりの深い八ヶ社（田笛社・鷹居社・瀬社・泉社・乙咩社・大根川社・妻垣社・小山田社）

を巡った後に、宇佐宮本殿に納められる【注7】。古い御験は下宮に、さらに下宮の古い御験は国東東海岸の奈多宮に納められ、海に流された。この八幡神御験の薦枕造替にかかわる一連の神事が、宇佐宮の特殊神事といわれる行幸会である。このように真薦の自生する三角池は『八幡宇佐宮御託宣集』に

豊前国下毛郡野仲の勝境の林間の宝池は大菩薩御修行の昔、涌き出でしむる水なり

と記述されているように、八幡神にとって切っても切れない極めて重要な霊池であった。

この薦神社の三角池は「八幡神」の発現した池であり、その池は山国川の支流に堤防を築いて作った代表的な人造池と見られている。三角池のまわりは森林でおおわれ、現在もこの池は用水として利用されている。近くに流れる山国川は暴れ川として有名で、井堰を作っても流されてしまうため、この三角池は灌漑用水として重要であった。『中津の歴史』によるとこの池は、八幡神にとって極めて重要な霊池であった【中津の歴史1980 99～101頁】。

宇佐神宮の建立に関して、次のような伝承がある。『無形民俗資料くぐつの舞及び相撲』によると元正天皇の時、719（養老3）年に大隅の隼人が大和朝廷を剪滅しようとしたので、朝廷は宇佐神宮に神託を乞うた。その

吾れ昔野仲郷三角池の薦を枕となして百王守護の誓をなす、依ってこの薦を以て吾社の御験とし凶賊どもを降伏させるであろう

という神託により勝利した後、宇佐神宮の三角池は薦池と呼ばれるようになったという【無形民俗資料くぐつの舞及び相撲1955 1頁】。

薦神社は源平合戦のとき、豊後の緒方氏によって破壊され、その後大友宗麟の時代にも焼失している。さらに竹折勉氏「三角池と八幡様」によると、

黒田孝高が豊前を征圧するとき、薦神社の池永宮司が反黒田派であったため、池永城に立て籠もって戦い、壊滅的な状況となる。三回の戦火に遭い、古文書は残らなかった。現在の社殿は、1622（元和8）年に細川忠興が再建して以来、中津藩主小笠原氏・奥平氏が修復に力を尽くした【竹折1994 89頁】。

このような理由から薦神社に関する文献は極めて少ない。しかし少ない資料から見えていくと、薦神社について『今仁文書』に「御薦社司系図」があり、初め薦社司が宇佐神宮の大宮司となっていたことがわかる。後に薦社の社司職が、宇佐氏によって相伝されるようになった。そこで宇佐国の神八幡神の創祀は現在の宇佐ではなく大畑地方に創り、後に宇佐の地に創建されたと考えられる。『中津市史』によると、

宇佐宮成立以前に宇佐氏の氏神として薦神社があり、辛嶋氏の氏神として酒井泉社、あるいは乙咩、矢候氏の氏神として宇佐安心院妻恒社、大神氏の氏神として小山田社、鷹居社などがあり、こ

これらの土族神が宇佐宮の成立として発展したと考えられる【中津市史1965 228～229頁】。

このように宇佐神宮は、宇佐氏、辛嶋氏、矢候氏、大神氏というように、いくつかの地方有力者の連合によって造られたゆえに、複雑な構造を有している。

宇佐神宮は成立以後、国家に維持されることになり、宇佐神宮の祖神社の薦神社芸能氏子集団は、行幸会に公開される神事として固定される。宇佐神宮と薦神社は直線距離で約16km離れており、薦神社と古要神社は非常に近い。古要神社は犬丸川沿いに位置し、薦神社とはほぼ1kmの距離にある。そして薦神社のすぐそばには山国川が流れており、古表神社はその山国川の河口付近の小犬丸にある。『豊前志』に

一艘は下毛郡伊藤田村古要社なり。古要を古くは古表といへり

とあることから古要神社は、中世には古表神社と呼ばれており、二つの古表神社が存在した【豊前志1931 168頁】。

現在は神廟など有し、福岡県吉富町小犬丸の古表神社のほうが立派であるが、当初は古要神社と古表社の関係は、薦神社の芸能を司る氏子の作る神社として同格の立場にあったと考えられる。『三毛の文化』によると古表神社は、明治に入り代々宮司であった渡邊家当主が国学者として名を成したため、地元から離れ、古文書や資料が散逸した【三毛の文化2013 408頁】【注8】。

4、古要神社

中津市伊藤田^{いとうだ}古要神社の説明板には次のように書かれている。

中津市の傀儡子の相撲舞は、宇佐神宮放生会として和間の浮殿で執行されていた。730（養老4）年、大隅日向の隼人の乱の際、八幡神が神軍を率いて鎮圧に向かい、細男（傀儡子）舞わして隼人を惑わした故実に基づく【注9】

古表神社、古要神社ともに息長帯比売命（おきながたらしひめのみこと・神功皇后）・虚空津比売命（そらつひめのみこと）が祭神となっているが、『宇佐市史・下巻』ではこの虚空津比売命を「くぐつひめ」ではないかとし、「くぐつ」の由来としている【宇佐市史・下1979 49頁】。現在この古要神社は、宇佐神宮の末社として神主が無住である。

中津市の伊藤田^{いとうだ}は北原に隣接し、古要神社は洞ノ上^{ほきのうえ}にある。伊藤田には多数の古窯跡があり、伊藤田古窯跡群として埋蔵文化財発掘調査が行われている。中津市の東南隅に位置する野依・伊藤田地区の丘陵裾に広範囲に須恵器を焼造した窯跡群が調査されている。10地点の窯跡群が発見されており、6世紀末から9世紀代におよぶ長期間の須恵器生産が行われたとみられている【注10】。

伊藤田の古要神社近辺は、八丁、草場^{くさば}、城土^{じょうど}、小平^{こべら}、山の中という字がある。この地域は犬丸川の川沿いに点在している。ここは北原も含めて三保地区ともいう。この三保地区には、古墳、窯跡、傀儡舞、人形浄瑠璃などさまざまな文化財が残されており、中津市の中でも重要な地区である。秋吉和夫氏の「上伊藤田の年貢」によると、上伊藤田の田地は作柄が悪いとしている。秋吉氏は1804（文

化元)年に書かれた「年貢免状」によって、肥沃な土地では60%の税率であるのに対して、伊藤田は30%の税率となっていることを指摘している。そして雑税として請藪米(藪を請けた者が自由に利用する為に懸かる税)、竹皮代、漆代、山上運上(藩の山に入って薪柴等を伐採する為に懸かる税)などが懸けられていた【秋吉1987 4頁】。ここでわかるのは上伊藤田が、農作をするより他で収入を得ていたということである。実際の当時の集落の実態を知ることはできないが、この伊藤田の人々は窯跡に見られるように作陶や木工芸、竹工芸などで生活を支えており、それらを携えて諸国を廻ったりして生活を支えていたと考えられる。それは請藪米、竹皮代、漆代等、工芸に関する税が徴収されていることからわかる【注11】。

5、傀儡舞

1087(寛治)年以降の成立とされる大江匡房の『傀儡子記』に次のように記されている。

傀儡子は、定まれる居なく、当る家なし。穹廬氈帳、水草を逐ひてもて移徒す。頗る北狄の俗に類たり。男は皆弓馬を使へ、狩猟をもて事と為す。或は双剣を跳らせて七丸を弄び、或は木人を舞はせて桃梗を闘はす【大江匡房 山岸徳平他校注1979 157～159頁】【注12】。

ここでは「傀儡子」のことを「狩猟を元来の生業としながら「党」とよばれる集団で漂泊し、男は剣術・人形つかい・奇術・女は唱歌・売春などを業とした」としている。「木人を舞はせて桃梗を闘はす」とあるが、この「木人」は木製の人形のことで「木偶」であり、「桃梗」は、「桃の木で作られた人形のことで相撲を取らせることである【注13】。

山路興造はこの大江匡房の『傀儡子記』の記述に対して「当時の実態に即した記述とは思えない」としている。それは『中右記』1114(永久2)年四月六日条に「丹波の国の傀儡子が小舎人に馬や綿を取られた」という訴訟を起こしているからである。また『明月記』1212(建暦2)年十月五日条に「喧嘩闘争をして相手を検非違使庁に訴えた」という近江国吉富荘広宿の傀儡の記事があることから、山路は法の保護を求めているので、無主の放浪民ではなかったと論じている。また傀儡子は平安時代後期にはすでに定着していたとし、「国々の傀儡」は国衙と結びついて神事芸能としての人形戯も育てていたのかもしれないとも語っている【山路1986 58頁】。中津市伊藤田の傀儡子舞を見ていくと、宇佐八幡の放生会の海上での舞を司り、かなり重要な位置を占めていることからこの山路の説は肯定できるが、一方国家と結びつかない人々の存在も考えられる。

5-1、伊藤田の傀儡師

1956(昭和31)年に出版された『大分県地方史・第6号』によると、古要神社の傀儡子は伊藤田の隣村きたばるの北原から移動してきたのであろうとされている。半田康夫氏は『北原村並御前座由緒書』から、同村民が木偶を操る傀儡子であった事が推察できるとしている【半田1956 11頁】。北原は「散所」といわれ、現在でも「北原人形芝居」は県指定無形文化財となっている。また地名として残されている豊後高田の「算所」にも「算所芝居」が残されており、現在でも歌舞伎が行われている。大分県の文化財調査委員であった久多羅木儀一郎氏は『北原芝居沿革考』の中で、豊前豊後にかつて「役者の村」と呼ばれた村があり、その代表的なものに「豊前国下毛郡北原村」「豊後国国東郡散所

村」「豊後国速見郡馬場尾村」をあげている【久多羅木・半田 1953 2頁】。また『大分県地方史・第6号』にはそのような特殊の技能を持った集団と一般農民は通婚関係がないと記されている【半田1956 11頁】。

久多羅木儀一郎氏は、『北原芝居沿革考』の中で、次のように指摘している。

北原の隣りの集落の伊藤田にある古要神社において、旧暦閏年の八月二四日に神納される人形相撲の行事は、元和三年復興されて以来、続いているといわれているが、その人形は全高一尺五寸余のもので、製作操作とも、傀儡師の舞わした人形を髻髷せしめるようである。これと北原人形とは、何等かの関係があるのではなかろうか【久多羅木・半田1953年 6頁】。

ここで久多羅木氏は、傀儡舞人形と北原人形の製作操作と舞わしが類似していることを示唆している。島通夫氏の『北原人形芝居おぼえがき（一）』によると、北原村の原田神社の鳥居には「文化十歳（1813年）二月吉祥日 奉寄進 当村氏子中 世話人 藤兵衛 茂兵衛」、「人形芝居五百年祭の奉納」という記載がされているという【島1972年 40頁】。この記載のため、地元にはかなり昔から人形芝居があったと考えられている。

また本徳照光氏によると、中津市三保北原地区には昔から歌舞伎や人形芝居の座がいくつもあり、九州各地に興行へ出かけていた【本徳2011年 27頁】【注14】。この座は芸能を職業とする集団で、それぞれ人形芝居、歌舞伎を行っていた。本徳氏はこの北原地区の座とすぐ隣りの伊藤田の傀儡舞との関係について、次のように述べている。

北原の旧家（庄屋）であった長岡家に伝わる『北原村並御前座由緒書』（元禄十（1697）年四月十一日付）という古文書によって、北原村は算所と呼ばれ、薦神社に属する陰陽師の住む村で、薦神社の祭礼にあたり、占い・祈祷その他の雑役を務めた。

北原村民が歌舞伎稼業をするようになったのは、元禄に近い頃で、古くは薦神社の陰陽師であり、宇佐神宮に関係の深い傀儡子の古要神社は極近くに隣接していることから関係があったと思われる【本徳2011年 28頁】。

と記している。これは前述した半田康夫氏の説の北原から伊藤田への移動したという説と合致する。『北原村並御前座由緒書』をみると、まず最初に、「豊前下毛郡筑地村北原算所と申候ハ、薦社陰陽師也。因之祭礼之吉日良辰、不浄之祓、心経会儀を主り、相勤来候」とある【中村1984年 2頁】【注15】。この由緒書は、1697（元禄十）年に書かれたもので、この中に「躍村」の座元のことが出てくる【注16】。

5-2、人形について

中津市伊藤田で行なわれる傀儡舞で使われる傀儡子の人形について1927年に書かれた『下毛郡誌』には次のように記されている。

この宮に大小五十八個の木偶あり。皆檜材にて色彩を施し、大は一尺五寸より小は七寸あり。頗

る古色を有す【下毛郡誌1927年 321頁】。

とあり、現在残されている「お舞人形」26体、「相撲人形」30体、「小豆童子」2体と一致している。この他に獅子頭が2面あり合計60体の人形がある。これらを操る人々を「オドリコ」といい、若者8名で演じている。『三保の文化・上巻』によると、「お舞人形」について次のように記してある。

「お舞人形」二十六体は、大小さまざまなくぐつで、胸部から上部には胡粉を塗り、赤や黒などの色彩で顔面に髪などを描いてある。頭部は結髪した形、冠・立烏帽子をつけた形を象ったものもある。胸部から下部にかけては下細りの棒状になっており、神衣を着せる。

とある。また「お相撲人形」については、

「お相撲人形」は三十体だが、相撲をとるのは東方・西方各十二体である。もっとも身長が高いのが東方横網格の祇園さまで、六十六・七糎である。西方の横網格の住吉さまは全身赤銅色に彩色してある。相撲人形には胡粉を塗り、赤や黒で彩色、目・鼻・口・耳・髪などを描き、髭をはやしているものもある。髪は住吉さまの外に二、三の神がミズラ、他は毛髪を束ね直立させた形で彫つてある。胴体や上肢をはっきりあらわし、片足は胴体とつながり、他の足と両腕は動かすことができるように竹釘で取り付けられている。お相撲人形の神名は祇園さまと住吉さまのほかはついていない。

とある。また「小豆童子」については、

「小豆童子」は着衣の裾から手を入れ、頭部と着衣につけられている両腕を直接操る人形で、「獅子頭」は口を開閉させることができる【三保の文化・上巻2000年 49頁】。

とある。この舞神事は「申殿」に幕を張りめぐらし、舞台上で古要舞が行なわれる。この「お舞のおはやし」は、繰り返し、繰り返し続き、人形の踊りも両手を水平に挙げて上下左右に振り続けるという踊りである。その後、「御祓神」、「獅子頭」、「羯鼓打」などが登場し、「磯良神」が登場し、「細男ノ舞」のノリゴトが唱えられ、「細男」の神と「御幣」の神二体が登場し舞を演ずる。その後、東西に分かれた「お相撲人形」が登場し、相撲が始まる。最後に横網格の住吉さまと祇園さまが勝負するが、祇園様が敗れる。すると東方の神さま全員が住吉さまに向かうが、住吉さまはみごとに全員をなぎ倒すというのが、この神事のあらましである。

6、まとめ

薦神社宮司の池永公比古氏は、薦神社について

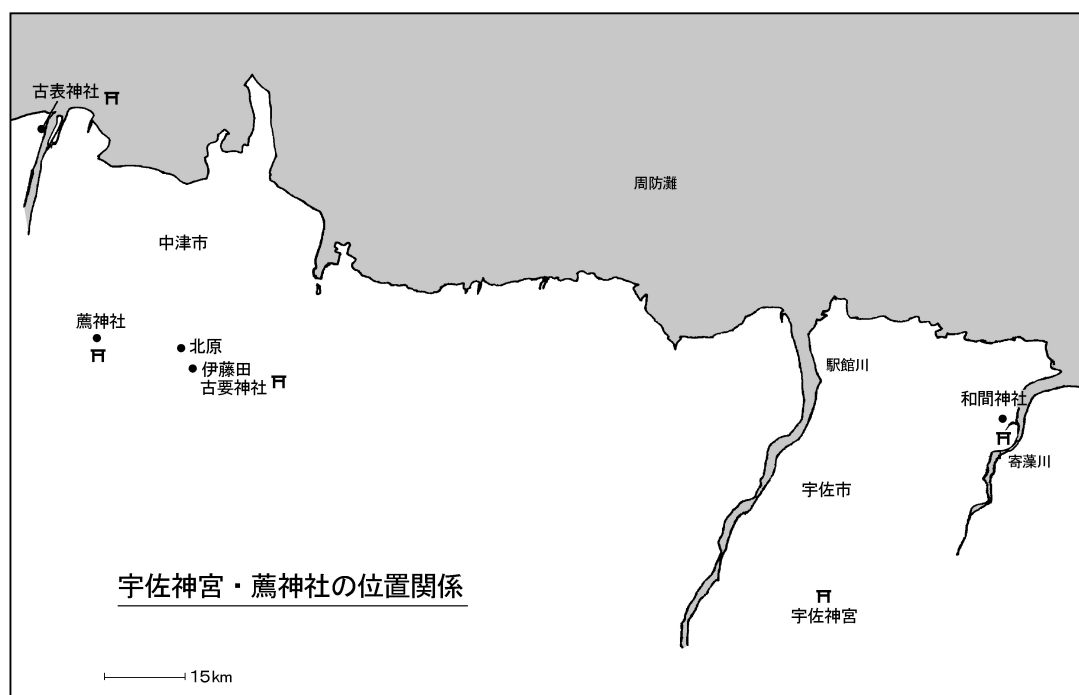
かつて社殿とともにあった神宮寺の七堂伽藍は、大友の兵火により悉く焼亡したと伝えられていますが、元和2年（1616）年細川忠興公が宇佐行幸会を復興した際に、薦神社の神門等を造営し崇

敬して後、小笠原氏、奥平氏と領主は代わっても、薦神社に対する信仰は変わらず、今日の薦神社の元が築かれたのであります【池永2005年 89頁】。

と述べておられる。この焼失によってすべての資料は消え、宇佐神宮との関係、古要神社、古表神社との関係も闇に包まれてしまった。そのため薦神社については、他の周辺の資料、伝承によって読み解いていくしかない。そこで薦神社の神人など芸能にかかわる人々について地元研究者の論文に注目して考察した。

宇佐神宮周辺地域には、さまざまな記録、伝承がある。その中の芸能に関するものうち、ここでは特に傀儡師について述べた。そしてそれらに関連するものとして人形浄瑠璃、歌舞伎を調べることにより、傀儡師の実態に近づけるのではないかと考える。今後の研究に委ねたい。『北原村並御前座由緒書』に北原は、薦神社に属する陰陽師の住む村で、薦神社の祭礼にあたり、占い・祈祷その他の雑役を務めたという記録があり、その北原との関連性について半田康夫氏の指摘のように、相互の繋がりが深いと考えられる。北原が薦神社に属する陰陽師の住む村であり、隣接する伊藤田には渡来芸である「傀儡相撲舞」が伝承されている。薦神社の御神体の池は渡来系土木技術者によるものとされ、遺跡からも渡来系集団の存在が認められる。薦神社から宇佐神宮へと発展していく際に、薦神社の神人の役割も付随していったと考えられる。行幸会の際の八箇社を巡るという式順についても、宇佐神宮成立に関わる重要な社を巡るという式順である。

「傀儡師」については、1796（寛政8）年～1798（寛政10）年に刊行された『摂津名所図会』にも載っており、諸国を巡る芸能者として知られていく。しかしここではそれ以前の宇佐神宮、薦神社に纏わる芸能集団・渡来系芸能集団としてとらえた【注17】。



【注】

- 【注1】着物を着た傀儡子の細男舞と、裸体の傀儡子の神相撲舞が行われる。
- 【注2】『逸文 宇佐宮託宣集』に「昔者、新羅國神 自度到來 住此河原 便即 名曰鹿春神 又 郷北有峯 頂有沼周卅六歩許 黄楊樹生 兼有龍骨（むかし新羅の神が渡ってきて、この河原に住み、名づけて鹿春郷（かわらのさと）と名づけた）」と記されている。田川郡には銅を産する香春岳があったので、新羅国（しらぎのくに）の神を祀る技術集団が住んでいたことが分かる。
- 【注3】曳汐氏の論文には元和3年に細川忠興が再興した放生会について記されている。これに従事した出仕者が記載されている。高瀬姓の者が9人おり、中津村高津の人とされる【曳汐康浩 『三毛の文化』第34号（34）2002年 408頁】。
- 【注4】初日に、宇佐神宮から和間神社までのおよそ8 kmを3時間かけて徒歩で神行する。二日目に蜷貝を寄藻川に放つ。三日目に再び宇佐神宮に神行する。行路の途中は、太鼓、鉦を叩く。
- 【注5】お宮参りや七五三、地鎮祭など生活に密着した祭儀が行われている。大貞という地名について福永光司は、中国の『周礼』春官「太卜」職に「凡そ大貞には君を立つるをとう」とあり、「立君の大貞」すなわち皇位継承の重大なる卜占と一致するとしている【福永 2013年 147頁】。また半田康夫の『宇佐放生会の傀儡子』によると、伊藤田の隣、北原は薦神社の「陰陽師」として「祭礼之吉日良辰、不浄の祓、心経会等の儀」を司ったという【半田 1956年 11頁】。
- 【注6】宇佐神宮宮司は、到津、宮成両家が務めてきたが、2006年薦神社宮司の池永公比古が宮司となった。
- 【注7】枕は古代日本でも遺跡の中から出土され、石や、土器の枕などがある。植物では草枕があり、菅枕、藁枕、薦枕などの茎を束ねて縛り作成した。また神楽歌の中に、神道儀式と結びついた宮廷の舞「薦枕」がある。段上達雄は、この「薦枕」を大隈日向両国の隼人の乱を契機に創作された依代であるとしている【段上達雄『真薦』3 「八幡神と薦枕」1994年 29頁】。
- 【注8】渡邊重春のことで、『堺市史』には次のように記されている。「渡邊重春は豊前中津の人、本姓は國前直、同國上毛郡四之瀬城主右京進重國九世の遠裔と稱せられてゐる。其家代々古表八幡宮に奉仕して大宮司となり、祖父重名は本居宣長の門下の巨擘であり、父重蔭も亦和歌を善くした。重春天保二年三月出生した。若冠國典を祖父重名の門弟京都郡津積村の定村直孝に受け既にして嘉永三年四月大阪に赴き、業を萩原廣道、櫻東雄、松浦道輔等に受け、又上京して野々口隆正に就き、更らに伊勢山田に足代弘訓を訪ひ、轉じて御巫清直に従游した。[-略-] その後、皇学校で教え、いくつかの神社の宮司となり最後には官幣大社廣田神社大宮司となり、堺で没した。享年六十、（國學者傳集成）南宗寺墓地に葬つた【堺市史7 1930年 478～480頁】。
- 【注9】福岡県吉富町の古表神社の「古表の傀儡子（くぐつ） 説明プレート」には次のように記されている。「細男舞、神相撲は討伐した隼人族の慰霊のために始まったという。傀儡子（くぐつ）とよばれる操り人形が、楽に合わせて舞を舞ったり相撲を取ったりする。手彫りのず

人胴の人形だがこれを特に傀儡子と呼んだのは、古来、海部の人々が莎草で編んだ袋にこの人形を入れて旅歩きをし、里の人々に海の信仰を勧め、これによって長寿と富を得させようとしたからである。そして遂には、人形もその遣い手も、彼らが奉ずる海の神までも傀儡子と呼ぶようになった。古表神社の傀儡子は、この古代海部芸能の伝統をひくもので、昭和31年国の重要無形文化財に指定されている。着物を着た傀儡子と細男舞と、裸体の傀儡子の神相撲は、もともと宇佐八幡宮が1日、8日、15日和間の浮殿で執行した放生会に出仕し、その際、神殿で演ぜられたものが、いつのころからか鎮座地でも行われ今日に至ったもので、4年に一度(オリンピック年)に奉納されることになっている。」

【注10】洞ノ上(ほきのうえ)という地名は、「崖の上にある地形」の意からつけられている。ホキは崖の意で、大分県には国宝の臼杵石仏があるがその石仏は「ホキ第1石仏群(堂ヶ迫石仏)」「ホキ第2石仏群」という。文字通り伊藤田の洞ノ上(ほきのうえ)には崖があり、崖の脇には横穴古墳がある。近接地区には、「八丁遺跡(弥生式土器片出土)」、「城山古墳群(古墳時代後期)」、「黒川古墳(6世紀後半から7世紀)」、「城山横穴古墳(薄葬令後)」、「岩井崎横穴古墳(7世紀ごろ・須恵器出土)」、「穂谷池窯跡(須恵器・須恵瓦出土)」、「踊ヶ迫窯跡群(須恵器・須恵瓦・4～5世紀のもの・仏教公示の538年以前に寺院があったのではないかという説有り)」などがある。

【注11】大分県は現在でも日本で唯一の竹工芸の公立専門学校を有し、竹工芸が盛んである。大分県各地を採訪すると、「毎年決まった時期に「箕作りさん」が廻ってきよる」という話を聞く。この人々が伊藤田の人々であると特定できないが、この地域だけでなく、いくつかの特定の地域の人々も、決まった地域を決まった時期に廻っていたようである。

【注12】『古代政治社会思想』山岸徳平、竹内理三、家永三郎、大曾根章介校注。1994年 岩波書店。見開き1ページ(漢文体350字)の文献であるが、『遊女記』と並んで重要資料である。

【注13】中国で魔除けのために門扉にはる神像をいう。『改訂新版世界大百科事典』によると次のように記されている。「古くから桃が邪気をはらうと信じられ、その枝で作った〈桃梗(とうこう)〉(桃人)を門に立てる風習があった。これがのちに意匠化されて〈桃符〉や〈桃板〉となり、さらにめでたい文字を書いた〈春聯(しゅんれん)〉と〈神荼(しんと)・鬱壘(うつるい)〉の二神を描いた〈門神〉に変化したと考えられる。」

【注14】『三保の文化』の中村静雄氏による「北原の歌舞伎座」に詳しい。そこで氏は、八つの座(①尾上座②祝栄座③山ノ座④御前座⑤亀鶴座⑥成駒座⑦稻荷座⑧海老松座)を紹介し、それぞれの座員について名を挙げている【中村1987年 2頁】。さらに明治から昭和にかけてあった座、座員、きまりについて記されていたが、昭和40年頃に絶えてしまったということである。久多羅木儀一郎氏によると、北原に歌舞伎があったときは、旅興行に出る場合、必ず薦神社の神事を済ませてから出発を例としていた。また役者の中には時季に応じて万歳、春駒、大神楽等をするものがあったという【久多羅木・半田1953年 5～6頁】。

【注15】『三保の文化・上巻』(2000三保の文化財を守る会)に中村静雄によって翻刻されており、『三保の文化』37号に同じく中村静雄によって詳しい解説が載せられている【中村1984年 2頁】。

【注16】この座元は『三保の文化・上巻』によると、1656(明暦2)年正月の往来手形に「おど

りこ八人、狂言のものを加え三十人」とあり、かなり大きな劇団であったことがわかる【中村2000 105頁】。この座を有する村は、後に歌舞伎、人形浄瑠璃をもって地方を巡るようになる。西村秀一によると、北原には1872（明治5）年に135戸あり、そのうち101戸が歌舞伎、操り人形を稼業としていた。座については人形芝居が八つ、歌舞伎が八から十あった。1956（昭和31）年に無形文化財の申請を行なう際に、歌舞伎、人形操り両方を申請したが、人形操りのみ指定になった。歌舞伎は興行を続けており、指定されなかった。北原の最後の歌舞伎役者浅尾雁蔵（本名島崎重次郎）の「日記明細帳」が残っており、1936（昭和11）年5月から1969（昭和44）年までの旅先の祝儀の明細が残っている【西村2001年 22頁】。このような芸能を持って神社に仕える人々について時代は遡るが、中野幡能は宇佐神人について「豊前国上毛、下毛、宇佐郡、豊後国東、速見郡に亘って三百六十氏が世襲」するとしている【中野1969年 451頁】。この豊前国上毛、下毛、宇佐郡、豊後国東、速見郡という地域はかなりの広がりを持っている。豊前国上毛、下毛までは宇佐神宮からおよそ13kmあり、豊後国東、速見郡までもほぼ同様である。この地域一帯に宇佐神宮の神人の勢力が浸透していた。宇佐神人は宇佐神宮にて舞楽、楽打を行っていた。この芸能を司る人々や、その気風を受け継いだ人々、それらを受け入れる風土によって伝承された芸能が、地域に広がっていった。

【注17】柳田国男と南方熊楠は、『傀儡記』と朝鮮の『高麗史』などに見られる「楊水尺」との関連を指摘した。柳田は「わが邦のクグツは九州より上がりたりと覚ゆれば、朝鮮を通過して大陸より入り込みしジブシーの片われではなきかなりと空想いたし候」と発言している【柳田1979年 293～294頁】。傀儡についての論考は、村上祥子「コクトウカクシノリと八幡古表神社・古要神社の傀儡子舞」、山口建治の「方相・傀儡・郭秃・鍾馗」に詳しい。村上によると、李朝後期の実学者・丁若鏞（1762～1836）は、『正言覚非』で水尺が官妓の別称であることを指摘し、楊水尺は柳などで筐を作り、移動して狩猟をしながら柳行李を売って生活しているとしている。また日本植民地時代の朝鮮警察関係者出身研究者・今村軔は『朝鮮風俗集』で、楊水尺は今日の白丁であるとしている【村上1999年 145～147頁】。今西龍は、李氏朝鮮以降の同化政策において才白丁（主に柳器制作を専業とする）と、禾白丁（主に屠者を専業とする）に分かれたとし、後に才白丁は才人と呼ばれ、禾白丁は白丁と呼ばれるようになったとしている。その後鮎貝房之進は、楊水尺がツングース系族の分派ではないかと指摘し、1918年には喜田貞吉によって「朝鮮の白丁と我が傀儡子」によって日本の傀儡と白丁を結びつける論攷が発表されている。一方、朝鮮側から見ると、『朝鮮王朝実録』には「我国有別種人（中宗五（1511）年八月）」とあり、「我国家才人白丁 其先胡種也（成宗二十二年四月）」とある。これはこの集団が他の民衆とは異なっていたことを示している。1920年代後半、宋錫夏は「伝承音楽と広大」という論文で、安藤正次の「傀儡一広大説」を受けた論を展開した。そしてその後の広大から男寺党への関わりを論じている。しかし「広大＝傀儡」説については尾形亀吉などによって否定されている。尾形亀吉は中国唐代の傀儡子の発音「kuluts」から日本の「kuguts」になったと説明した。また河竹繁俊は中国の傀儡子が「郭秃（かくとう）」と称されたことから朝鮮語の人形劇の名称「コクトウ閏氏」となり、日本のクグツになったとしている【河竹1966年 76頁】。この説に対してさらに李杜

鉉は蒙古語の「怪物の面」あるいは「仮面」を意味する「コクトコチン」が「郭禿」の前に前に来る言葉であるとした【李杜鉉1990年 205頁】。1930年代に三田村鳶魚は現地調査をし、「朴僉知劇（パクヒョンジ劇＝コクトウガクシノルム）」と日本の人形との比較を行った【川村1994年 219頁】。また金在喆によって本格的に朝鮮の人形劇についての研究が始動し、『朝鮮演劇史』で朝鮮の人形劇はインドからの渡来であるとしている【金在喆1939年 162～163頁】。これに対して小沢愛囀も高野辰之の「傀儡子の先祖はチゴイネル即ちジブシーであるかも知れぬ」という「歌舞伎第四号・1925・8」での発言を取り上げ、朝鮮の白丁と傀儡子との関連を支持している【小沢1944年・村上1999年 152頁】。この傀儡子が遊女であったとして論を進めたのが滝川政次郎で、『遊女の歴史』の中で百太夫神の信仰を持つ白丁が日本渡来以前にすでにその信仰を持っていたことを明らかにした。滝川は傀儡子について朝鮮からの渡来人としている【滝川1965年】。これに対して林屋辰三郎は奈良時代の乞食者の後身とし、古代の漁労民・狩猟民に求めている【林屋1960年 315頁】。角田一郎は人形遣い集団の視点から注目したが、『人形劇の成立に関する研究』（1963）で朝鮮のコクトウ閣氏ノルムについて「朝鮮古代の郭禿の系脈を認めるとしても、朝鮮古代の人形劇がその郭禿移入に始まると直ちに言うことはできないのである。（一略一）朝鮮も中国と同様に自然発生的な原始人形劇があつて、そこへ中央アジアからの伝播を受け入れた後にさらに中国からの逐次伝播を受けて行ったと考えるのである【角田1968年 213頁・村上1999年 153頁】」と述べている。傀儡子について角田は、過重な課役に耐えかねて逃亡した逃散農民としている。これは林屋辰三郎の「斑田農民の舎人化」説と同一である【林屋1960年 315頁】。徐淵昊も呪術性と宗教性を核心とした要素を持つ人形戯がコクトウカクシノルムと相関性も持ちながら伝承、発展したとしている【徐淵昊1990年 73頁・村上1999年 154頁】。しかしながら角田の「逃散農民」が傀儡子となったというのは、通婚例などから考えにくい。川村湊は「傀儡子と社堂牌一日韓の比較芸能史の試みー」で日本の傀儡子と遊女の関係が朝鮮における「男寺堂」と「女寺堂」の関係に類似したものとし、傀儡子・遊女の渡来人説を支持している【川村1994年 219頁】。さらに人形の類似から朝鮮からの伝来であるとしたのが沈雨晟である。沈雨晟は朝鮮に伝わるククトウカクシノルム（ククトウ閣氏ノルム）と呼ばれる人形劇の人形と中津・伊藤田の傀儡子人形が酷似している点に注目し論を展開している。これについては沈雨晟の『男寺堂牌研究』に詳しい【沈雨晟1978年 184～188頁】。なお沈雨晟は自身も人形を操るが、その人形を大分県玖珠町のわらべの館に寄贈している。また山口信枝は『宮座の変容と持続』の中で「傀儡子の住吉大神と朝鮮半島の傀儡子芸能」について朝鮮と日本との比較について詳細に述べている【山口2010年 255～288頁】。

【引用文献】

- 中野幡能編『八幡信仰事典』2002年 戎光詳出版
宇佐市史刊行会編『宇佐市史』下 1979年 宇佐市史刊行会
渡辺重春『豊前志』1931年 二豊文献刊行会
大分県下毛郡教育委員会編『下毛郡誌』1927年 大分県下毛郡教育委員会

- 曳汐康浩「八幡古表神社の傀儡師」『三毛の文化』第34号(34)2002年 中津地方文化財協議会
 重松明久『八幡宇佐宮御託宣集』1986年 現代思潮社
 中津市刊行会編『中津の歴史』1980年 中津市刊行会
 中津市教育委員会編『無形民俗資料くぐつの舞及び相撲』1955年 中津市教育委員会
 竹折勉「三角池と八幡様」『中津下毛地域の歴史』1994年 大分県下毛地方振興局
 中津市史刊行会編『中津市史』1965年 中津市史刊行会
 中津地方文化財協議会編『三毛の文化』2013年 中津地方文化財協議会
 半田康夫『大分県地方史』第6号1956年 大分県地方史研究会
 久多羅木儀一郎・半田康夫『北原芝居沿革考』1953年 大分県文化財調査委員会
 大江匡房「傀儡子記」『古代政治社会思想』1979年 山岸徳平, 竹内理三, 家永三郎, 大曾根章
 介校注 岩波書店
 秋吉和夫「上伊藤田村の年貢」1987年 『美保の文化』46号 三保の文化財を守る会
 山路興造「傀儡」『中世の民衆と芸能』1986年 京都部落史研究所
 島通夫『北原人形芝居おぼえがき』1972年 邪馬台発行所
 本徳照光「北原芝居・神相撲ーくぐつの舞」『三毛の文化』6 2011年 中津地方文化財協議会
 中村静雄「北原の歌舞伎座」『三保の文化』49号1987年 三保の文化財を守る会
 中村静雄「北原村並御前座由緒書」『三保の文化』37号1984年 三保の文化財を守る会
 西村秀一「北原人形芝居の興行について」『三毛の文化』33号2001年 中津地方文化財協議会
 中野幡能『八幡信仰史の研究』1969年 吉川弘文館
 池永公比古『西日本文化』CSN409号 2005年 西日本文化協会
 堂園壺中庵『算所歌舞伎』1956年 豊後高田市文化協会
 久多羅木儀一郎・半田康夫『北原芝居』1953年 大分県文化財調査委員会
 段上達雄「八幡神と薦枕」『真薦』3 1994年 薦文化研究所
 堺市役所『堺市史』7 「自治体史テキスト検索および編纂史料閲覧システム」デジタル『堺市史』
 1930年(1977年復刻 清文堂出版)
 『改訂新版世界大百科事典』2008年 平凡社
 柳田国男『南方熊楠往復書簡』1976年 平凡社
 村上祥子「コトウカクシノリと八幡古表神社・古要神社の傀儡子舞」『朝鮮学報』第百七十一
 輯 1999年 朝鮮学会
 山口建治「方相・傀儡・郭秃・鍾馗」『神奈川大学21世紀COEプログラム・人類文化の研究の
 ための非文字資料の体系化』研究成果報告書2008年 神奈川大学
 滝川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女』1965年 至文堂
 林屋辰三郎『中世芸能史の研究』1960年 岩波書店
 川村湊「傀儡子と社堂牌ー日韓の比較芸能史の試みー」『アジア稲作民の民俗と芸能』1994年
 雄山閣
 沈雨晟『男寺堂牌研究』同文出版 1978年 韓国
 国指定文化財等データベース・文化庁
 山口信枝『宮座の変容と持続』2010年 弦書房

KOMO JINJA SHRINE and the PUPPET PLAYERS

TABATA Hiroko

The puppet players in *Koyou Jinja*, (Koyou Shrine), at *Idouda*, *Nakatsu City*, and in *Kohyo Jinja*, (Kohyo Shrine), in *Koinumaru*, *Yoshitomi-machi*, *Chikugo-Gun*, *Fukuoka Prefecture*, are conventionally said to be “*Jinin*”, (low-ranking *Shinto* priests who performed chores and duties in the shrines like servants), belonging to the *Usa Jingu* (Usa Shrine). That’s because the puppeteers in Koyou Shrine and Kohyo Shrine are believed to have belonged to *Usa Jingu*, and “*Kugutsu-Mai*”, (the puppet players’ dance), was a kind of dance traditionally performed on the boat at the *Usa Jingu* when they had “*Houjoue*” (a ceremony of releasing captive animals). The point of this thesis is to raise skepticism as to the origin of the “*Jinin*” puppet players. It is possible that they were originally *Jinin* belonging to Komo Shrine, not to Usa Shrine, which has branched out from Komo Shrine.

In *Houjoue*, the players from the two shrines would come up to each other by boat and, then, would manipulate their puppets to dance. After that, they would leave and the puppet players from both shrines would continue performing at their respective shrines.

In the main subject, I’d like to examine the Koyou Shrine at *Idouda*, *Nakatsu City*. I wonder if the puppet players were originally from the adjoining district of *Kitabaru* that was famous for “*Ningyo-joruri*”, a Japanese puppet show. The authenticating certificate of the *Namigozen-za* theater in *Kitabaru* issued in *Genroku* era, (17th century), has a record that the puppet players in *Kitabaru* moved to *Idouda*. It also says that *Kitabaru* was the settlement for “*onmyoji*”, (diviners), in Komo Shrine, although there are no material evidences to back up this belief since the settlement burned down after being attacked by the *Ohtomo* Clan during the Age of Civil Wars. That is the reason why the relationship between the Komo Shrine and the puppet players cannot be clearly established. However, according to the papers produced by local researchers and from local legends, the puppet players were likely to have been “*Jinin*” *Shinto* priests from *Komo-Jinja Shrine*.